

ヴァラッロのサクロ・モンテとその礼拝堂装飾（2）

The Sacro Monte of Varallo and the Decoration of its Chapels

関根 浩子

Hiroko SEKINE

崇城大学芸術学部美術学科教授

Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

キーワード：ヴァラッロ、サクロ・モンテ、現在の状況、略史、礼拝堂装飾、芸術家

Keywords: Varallo, Sacro Monte, Current Situation, Brief History, Chapels Decoration, Artists

（承前）第16号（1）からの続き

2 各礼拝堂の装飾・設営と従事した芸術家たち

本章では、山上の聖域内の礼拝堂群の装飾の主題や技法、制作年代、また、従事した芸術家たちに関する基本情報を、先行研究を参考にしながら、現在の礼拝堂の番号順に概観していく。併せて作成した表1を参照されたい。

なお、概観の作業中、多くの礼拝堂の彫刻や壁画の制作年代や作者の同定が先行研究によって異なることが判明した。そこで同定に相違がある場合は、比較検討した上で、近年の論考や概説書、最新のサクロ・モンテ管理運営財団のホームページ⁽⁴³⁾の記載に依拠すると同時に、幾つかの礼拝堂については同財団に直接照会してできる限り正確を期すようにした。さらに註には、典拠とした文献を明記していく。

ラ・ポルタ・マッジョーレ

現在、壁で囲まれた山上の聖域へは、楣部分に「この新しいエルサレムは、救世主の生涯や受難、すべての行為を表現するものなり」⁽⁴⁴⁾と書かれた大きな門、すなわちマッジョーレ門から入ることになっている。この門は、ペルージャの建築家・都市計画家であったガレアツォ・アレッシ（1512-72）のプロジェクトに基づいて1565-66年までの間に建造され、以後、現在の第13堂（キリストの誘惑）の近くにあるかつての小さな入口にとって代わったものである。この門は、また、アレッシが『ミステリーの書』の中で計画した新しい聖なる内容、つまりキリストの地上での生涯を時系列で表現しようとした新しい都市計画的・建築的配置への導入部の役割も果たしている。但し、アレッシのプロジェクトのうち彼の存命中に具現されたのがこの門と第1堂だけであったことは、既に前号で述べた通りである。

創設者B. カイーミと天才的芸術家G. フェッラーリのモニュメント

マッジョーレ門をくぐると、第1堂に続く道の両側に1体ずつ、花崗岩製の台座上に設置されたブロンズの全身像が目飛び込んでくる。第1堂に向かって右に配されているのはサクロ・モンテの創設者フラ・ベルナルディーノ・カイーミ像、左は初期に活躍した芸術家ガウデンツィオ・フェッラーリ像である。これら2体の像は、ロッカ・カステッロのベネデット・カレッリ伯爵(1772-1852)の遺贈⁽⁴⁵⁾により、地元出身の彫刻家ジュゼッペ・アントニーニ(1833-89)⁽⁴⁶⁾のマケットに基づいて制作されたものである。銅に打ち出し細工を行い、内部に木製の骨組みを備えたこれらの像は、カレッリ伯爵の没後14年経過した1866-67年に具現されたが、鑄造したのは大型の銅像制作を専門とするミラノの彫刻家ピエトロ・ズッキ(19世紀後半に活躍)⁽⁴⁷⁾、制作地はノヴァーラの鑿師で金銀細工師でもあったジュゼッペ・ペリッティの工房⁽⁴⁸⁾であった。

第1堂：「アダムとエヴァ」(もしくは「地上の天国」)

第1堂はキリストの受肉と人類の救済の理由、起源である原罪に献じられており、さまざまな動物と、地上の楽園にいる人類の祖先アダムとエヴァの彫刻像、並びに壁画によってその場面が表現されている(図23)。上方には2人を罰しようと父なる神の像も姿を見せしている。本礼拝堂の彫刻像と壁画による設営については、トレント公会議が示した聖なる図像に関する指示に影

響されて慎重に議論がなされた⁽⁴⁹⁾。

礼拝堂：この礼拝堂は、ミラノの銀行家ジャコモ・ダッダの要請でガレアツォ・アレッシが起草したサクロ・モンテ全体の改造計画の一環として、すでに1566年にはジャコモの出資で建造されていた。

彫刻：堂内のアダムとエヴァの像は、1580年代以降、ノヴァーラ司教の意向で3度も制作され、交換された。最後は、すでにクレアのサクロ・モンテで活動経験があったフランドル出身のジャン・ドウ・ヴェスパン(c.1567-1615)、通称ジョヴァンニ・タバケッティ⁽⁵⁰⁾が1595-99年までの間に両像をテラコッタで制作し、ルガーノ湖に面したカイーノ出身の彫刻家ミケーレ・プレスティナーレ(?-1597)⁽⁵¹⁾が制作した別の2体の像と置き換えた。因みに、プレスティナーリが制作した像は第23堂「キリストの捕縛」で再利用されている。また、同じプレスティナーリと地元のアラーニャ出身のジョヴァンニ・デンリーコ(1559-1644)⁽⁵²⁾(2人は1594年にタバケッティと共作。仕事の請負人であったペルージャ出身の画家・彫刻家、ドメニコ・アルファエニ(生没年不詳)⁽⁵³⁾が2人を雇用)が、逼真的な動物の制作に当たった。しかし、そうした動物像のうち鹿や小山羊、七面鳥と雛、野ウサギ、ウサギ、緑トカゲは、1884年にヴァラッロのバローロ彫刻学校の生徒の助けを借りた地元出身の彫刻家ジュゼッペ・アントニーニによって差し替えられた⁽⁵⁴⁾。なお、ヴォールトから吊り下げられている父なる神のテラコッタ像は、ノヴァーラ司教バスカベ(1593-1615年在位)の求めで1604-13年に付加されたもの

である⁽⁵⁵⁾。

絵画：アトリウムの天地創造の壁画はドメニコ・アルファーニの作⁽⁵⁶⁾と推察されている。また、堂内の世界の創造の壁画はジョヴァンニ・バッティスタ・デッラ・ローヴェレ（c.1561-c.1627/30）、通称フィアミンギーノ（兄）⁽⁵⁷⁾が1594年頃描いたとされるが⁽⁵⁸⁾、1884年にはパルマ出身ながら若くしてヴァラッロに移った画家フランチェスコ・ブルラツィ（1846-1908）⁽⁵⁹⁾によって描き直されている。堂内のスタッコ装飾は、堂外と同様、以下のマンゴーネ（もしくはモイエッタ）兄弟に帰される。

その他：前室のスタッコ装飾は、アレッシのデザインに基づいてカラヴァッジョ生まれのジェローラモ（生没年不詳）とヴィンチェンツォ（生没年不詳）のマンゴーネ（もしくはモイエッタ）兄弟⁽⁶⁰⁾が1583年に制作したものである。

修復：1968年に彫刻群が修復され、1987年には建築全体とガラスが修復され、続いて壁画と前室のスタッコ装飾も修復された。

【ナザレの総体】

続いて巡礼路は、最初期の礼拝堂群の中で今日まで残ったキリストゆかりの場所のうちのひとつである「ナザレの総体」と呼ばれる古い複合的建造物へと進む。現在の第2堂に当たる「受胎告知」の礼拝堂は、早くも1514年におそらく単独で建造されたと考えられるが、その時点で山頂のエルサレムの都市からは意図的に離して設置されていた。現在の総体は、第2堂「受胎告知」と第3堂「マリアのエリサベツ訪

問」、第4堂「聖ヨセフの最初の夢」（天使からマリアの懐妊についてのお告げを受ける聖ヨセフ）と、建造年代の異なる3つの礼拝堂から成っているが、セージア溪谷の典型的な建築様式や技術が用いられているため、建築的には均質な印象を与えるものとなっている。同総体では、時代が移り変わる中で、以下のように、聖なる場面の変更やさまざまな役割の付与がなされた。

第2堂「受胎告知」

この礼拝堂では、神の子を身籠るとの大天使ガブリエルによるマリアへのお告げの場面が示されている（図24）。

礼拝堂：ガウデンツィオ・フェッラーリの設計に基づいて1514年より少し後に建造された際には、現在第9堂にあるガウデンツィオ自身の手になるテラコッタの聖母子像を配して「ロレートの聖家」を表していた。16世紀の40年代にパレスティナの聖蹟の場所に基づく古い配列が放棄されると、当初は現在の第4堂の奥の何もない部屋にあったと考えられる受胎告知のミステーロには新しい部屋（現在の第3堂「マリアのエリサベツ訪問」）が充てられた。さらにそれから約30年後、アレッシとジャコモ・ダッダによるサクロ・モンテの再編計画に従って、受胎告知のミステーロは最終的に現在の第2堂、つまりかつてのロレートの聖家の部屋に配されるに至った。石製の入口と木製格子は16世紀の80年代に建設、設置され、さらに床も張り替えられて、ガラスも付けられた。

彫刻：第3堂から移されてきたマリア像と大天使ガブリエル像は、1510年頃制作さ

れた木製のマネキンで、見える所だけを完成して彩色し、布を纏わせたものである。2体の像の面部や物腰の表現には、レオナルド・ダ・ヴィンチを嚆矢とする魂の在り様の表現の反映が見て取れ、その質の高さから、制作者はガウデンツィオ・フェッラーリと目されている。なお、ガブリエル像の衣は、石膏処理後、18世紀に彩色が施されたもの、また、マリアの絹の浮き織錦のタフタである衣は19世紀のものである。さらに、彩色された寄木細工の祈祷台は18世紀のものである。

絵画：壁面には、受胎告知のミステーロを預言した旧約聖書に登場する5人の預言者、左からエレミア、ミケア、イザイア、ハガイ、ザカリアが描かれているが、制作者は同定できず、16世紀前半のガウデンツィオ派の手に帰されている。

第3堂「マリアのエリサベツ訪問」

この礼拝堂では、神の意志で身籠ったマリアが同様に神の意向で身籠った従姉妹のエリサベツを訪問するミステーロが示されている（図25）。

礼拝堂：この矩形の礼拝堂はナザレの総体の一部であり、1544年の少し前にセージア溪谷の建築様式で建造され、「受胎告知」のミステーロに献じられていた。それは、1944年に取り去られてサクロ・モンテ博物館に移された古いガラスによって証明可能である。かつて本礼拝堂の窓を塞いでいたそのガラスには、受胎告知の場面と「1544」の年記が確認されるからである。しかし、サクロ・モンテの再プロジェクトに伴い、1572年以降、この礼拝堂には御

訪問のミステーロが充てられた。

彫刻：受胎告知を表現していた彫刻像が現在の第2堂に移された後、この第3堂にはおそらく2体の木彫のマリア像とエリサベツ像（かつて第4堂に隣接する下方の場所にあった）が置かれていたが、やがて使用されなくなって壊されたと考えられる⁽⁶¹⁾。

現在の6体の像（マリア、エリサベツ、聖アンナ、ヨアキム、ヨセフ、ザカリア像）は、1611-13年に不詳の彫刻家⁽⁶²⁾によってテラコッタで再制作されたものである。

絵画：他方、壁画は1544年に完成されたもので、リュネットには受胎告知を預言した預言者たち（胸像）、天井にはアラベスク模様、そして側壁には室内のインテリアを模して壁布が描かれている。作者としては、ガウデンツィオの後年の追随者のひとり、セージア溪谷で活躍したオレージョ出身のフィリッポ・カヴァッラツィ（16世紀）やチェーザレ・ルイーニの名前が挙げられてきたが、現在では彫刻同様、不詳の画家の手になるとされる⁽⁶³⁾。これらの壁画はひどく傷んでいたため、19世紀末にヴァラッロ出身のアンドレア・ボニーニ（1835-1924）⁽⁶⁴⁾によって描き直された。

第4堂：「聖ヨセフの最初の夢」（天使からマリアの懐妊についてのお告げを受ける聖ヨセフ）

この礼拝堂では、天使がヨセフの夢に現れて結婚相手のマリアが神の御業によって男児を待つ身であると告げる、ヨセフの最初の夢の場面が表現されている（図26）。

礼拝堂：この礼拝堂もナザレの総体の一部

をなしており、元来は、隣接する左側の何もない空間に設けられていた最初の「受胎告知」の部屋（ホテルに通じる細道に面した隣接の部屋）の外側のアーケードに当たっていた。つまり第4堂は、かつては受胎告知の旧礼拝堂と現在の第3堂「御訪問」との間の移動用の回廊だったのであり、サクロ・モンテの入口の近くに巡礼者のホテルが建設される1597年までは、この回廊のアーチの下で巡礼者に食料が売られていたという。その後、17世紀の10年代から20年代までの間に、司教バスカペの指示でこの壁のない回廊のアーチに壁が設けられ、現在の礼拝堂が建設されるに至った。なお、この礼拝堂には木製の格子が設置されていたが、1960年にピエモンテの建造物保護局の設計に基づいてクラヴァリアーノ出身のミケリーノ・トゼッティによって鉄製格子が具現されて先行の木製格子と交換⁽⁶⁵⁾された。

彫刻：聖ヨセフと天使、縫物をするマリアの3体のテラコッタ像は、ジョヴァンニ・デンリーコの手になる17世紀初めの作品である。しかし、かつてミケーレ・ターザはこれら3体を誤ってタバケッティの作品とみなしていた。また、彼によれば、縫物をしているマリア像は、ヴァルドゥッジャのリヴァドーリ家所蔵のガウデンツィオ・フェッラーリの手になる小さなテラコッタ像を手本として制作されたという⁽⁶⁶⁾。さらにサムエル・バトラーも誤ってこれらの像をタバケッティに帰したため⁽⁶⁷⁾、このマリア像とヨセフ像から1900年にとられた2つの石膏型は、誤ったアトリビュートのままブリュッセルにある16世紀記念博

物館で展示された⁽⁶⁸⁾。1850年にはヴァラッロ出身のカルロ・ジュゼッペ・デルザンノ（19世紀、生没年不詳）によって、これらの像の大部分に塗り直しが施されたが、1969年にも修復が行われ、ヨセフの髭と天使の鬘が交換された⁽⁶⁹⁾。なお、これらの像は、1977年にミラノで開催された「ロンバルディアの17世紀展」にも出品されている⁽⁷⁰⁾。

絵画：当初の室内装飾の作者は不詳である。現在の室内調度に見せかけた描画によるタペストリー表現は、先行の壁画がひどく傷んでいたために、20世紀の20年代に、ボルゴセージア出身の画家ジュゼッペ・ブラツィアーノ（生没年不詳）とヴァラッロ出身のティート・ルクレツィア・レガルディ（1877-1945）がエミリオ・コンティエーニの指揮下で描き直したもの⁽⁷¹⁾である。

「ベツレヘムの総体」

ナザレの総体と同様、ヴァラッロのサクロ・モンテの最初期の礼拝堂群のうち今日に伝わるキリストゆかりの場所のうちのひとつで、1514年の最古の案内書にも挙げられている。しかし1514年当時は、キリストの降誕とマギの礼拝、神殿奉献を表現する彩色木彫像か彩色テラコッタ像が連結された単一空間に置かれた状態であった。屋根裏の点検時に、第5堂「マギの到着」が建設される前に、この総体への当初の入口となっていた階段の痕跡が見出されている⁽⁷²⁾。

空間の配列や中央の何もない空間の入り組んだ構造は、おそらく創設者カイーミ神

父の指示に従って、聖地ベツレヘムの降誕聖堂の下堂のそれを注意深く忠実に模倣したことに起因しているが、多様な小部屋にガウデンツィオ・フェッラーリや彼の助手たちの彫刻像が配されるようになるのは、1514年より少し後のことである。そして16世紀の10年代から20年代までの間に、ガウデンツィオによって第5堂も建造され、堂内の設営もなされた。その後1566年から1572年までの間に、第9堂「聖ヨセフの2度目の夢」が付加される。また、1614年には「マギの到着」の前の前室（廊下）と、第5堂と第6堂との間の狭い通路がジョヴァンニ・デンリーコと、ヴァラッロ生まれの彫刻家、建築家のバルトロメオ・ラヴェッリ（1589-1645/46）⁽⁷³⁾の設計で建造された。さらに19世紀半ばには、ヴァラッロ出身のジャコモ・ジェニアーニ（1796-1849）⁽⁷⁴⁾の設計で1846-53年に第5堂の前方にアーケードも設けられたが、これによって16世紀の切妻壁の一部は失われた。

1984年にピエモンテ州自然保護区によって総体の屋根と、続いてガラス窓が修復された。

第5堂「マギの到着」

この礼拝堂では、イエスが生まれたグロッタ近くにマギたちが到着した所が表現されている（図27）。

礼拝堂：同堂は1516年にミラノの貴族カステランツァ家の出資で着工され、経済的問題で中断されたものの、再開されて1519-20年に完成された。当初は前室やアーケードがなく、タンパンの装飾や蛇

腹、ロンバルディアの16世紀的趣味を示す星のモチーフの壁面装飾、そして入口の扉（後に塗り込められた）が露出していた。また、木製格子も鉄格子もなく、巡礼者は1614年までは開いた扉を通して堂内に足を踏み入れることができた。

彫刻：堂内の設営は、ガウデンツィオと彼の助手たち（息子のジェローラモ・フェッラーリやフェルモ・ステッラ・ダ・カラヴァッジョ、また、おそらくはジュゼッペ・ジョヴェノーネなど）が16世紀の20年代に具現したもので、テラコッタ製の主役たちは堂内の現実空間に配され、その他の列成す人々は壁画中に描かれている。壁から飛び出してはいるものの、後脚の一部が壁に塗り込まれている馬像は、現実空間と絵画空間の融合を目指したガウデンツィオの意図を示していると言える。

絵画：壁画も、ガウデンツィオと彼の助手たちが16世紀の20年代に制作したもので、壁画中の群衆は観衆役を担っている。

修復：1969年に彫刻群の修復が行われ、鬘と顎髭も交換された。また、1990年にはガラス窓が修復された。

第6堂「キリストの降誕」

ベツレヘムの総体の一部をなすこの礼拝堂では、グロッタの中でのキリストの誕生の場面が表現されている（図28）。

礼拝堂：1514年の最古の案内書が、聖地のイエスが生まれたグロッタを模して作られた「窪んだ」場所とだけ記している通り⁽⁷⁵⁾、彫刻群は1514年より後に付加されたものである。イエスが生まれた場所を示す下方の大理石製の星形や、龕を挟むよう

に左右に設けられた小階段は、ベツレヘムの降誕教会に今なお見られるものを模して造られている。グロッタの壁は、当初は漆喰を塗って青色で彩色されていたが⁽⁷⁶⁾、部分的に残っていたその漆喰も1969年の修復時に取り除かれ、現在は下層の壁体が露出する形になっている。

彫刻：マリアと聖ヨセフのテラコッタ像はガウデンツィオ・フェッラーリ作品で、最近の研究では1515年頃の制作とされている⁽⁷⁷⁾。1510-11年の制作と考えられているアローナのサンタ・マリア・ヌオーヴァ教区教会の祭壇画の下層中央の幼児イエスの礼拝図の表現や、1513-15年頃の制作と考えられるロッカピエトラのロレートの聖家の彩色テラコッタの聖母子像、また同聖家の外壁の1515-16年頃の作とされるリュネットに描かれた幼児イエスの礼拝図の表現との酷似から、16世紀の10年代の制作であることは疑いない。同様にガウデンツィオが制作したものであった当初の幼児キリスト像は1852年に盗難に遭って失われてしまったため、以後は、ジュゼッペ・アントニーニの原型に基づいてヴァラッロのバローロ彫刻学校の教官であったジョヴァンニ・ロンゲッティ（生没年不詳、19世紀に活動）⁽⁷⁸⁾が彫った木彫像がそこに置かれている。

絵画：グロッタの側面には、ガウデンツィオ派の手になる2人の礼拝の天使を描いた16世紀の壁画の名残が認められる。

修復：1973-74年にグロッタとテラコッタ像が修復された。この時、彫刻像の鬘と顎髭も交換されたが、それらはヘアネットの上に本物の毛髪を盛って作られている⁽⁷⁹⁾。

第7堂「羊飼いの礼拝」

ベツレヘムの総体の一部をなすこの礼拝堂では、生まれたばかりのイエスを羊飼いが礼拝する場面が表現されている（図29）。

礼拝堂：すでに1514年の最古の案内書に言及されている通り⁽⁸⁰⁾、山を穿って地中にあるように造られている。

彫刻：最古の案内書の記述から推察されるように、当初はマギたちが入場してくる「降誕」の場面を木彫像⁽⁸¹⁾で表現しており、幼子イエスの近くには牛と驢馬の存在も指摘⁽⁸²⁾されていた。1514年直後の施設全体の再編成期に当たる1515-17年頃、おそらくガウデンツィオ・フェッラーリと助手たちによって、テラコッタでマリアや聖ヨセフ、彼らに近い2人の羊飼い像が制作された。そして、この場面を「降誕」から「羊飼いの礼拝」に変更することを望んだ司教タヴェルナの意向で、1617-28年にジョヴァンニ・デンリーコによって鉄柵近くの2体のテラコッタの羊飼い像と奏楽の天使像が付加された。また、特定できない時代に、4片から成る天使による天上の賛歌の木製浮彫も壁面に加えられたが、これらは1771-73年に取り壊された旧聖堂から移されたものと考えられている⁽⁸³⁾。

絵画：損傷が激しく、当初の壁画の痕跡を辿るのは困難である。19世紀末に描き直された。

修復：1869年にジュゼッペ・アントニーニが像を修復し、ジョヴァンニ・ロンゲッティが残っていた壁画を修復した。同年、窓が拡大され、隣接の場所のヴォールトがセメントで塗られ、鉄柵が設置された。

第8堂「神殿への奉獻」(もしくはキリストの割礼)

ベツレヘムの総体の当初の核の一部をなし、1514年の最古の案内書にも言及されているこの礼拝堂では、キリストの神殿奉獻と、ユダヤ教の伝統に従った生後40日目の割礼の場面が表現されている(図30)。

礼拝堂：大理石製の隅切りにした入口と楕円形の階段は、パレスティナから齎された図面に基づいて、ベツレヘムの上堂からグロッタのある下堂へ通じる入口を細部に亘って模倣、再現している。

彫刻：1510年代の制作と推定されるテラコッタ像はガウデンツィオ・フェッラーリとその助手たちに帰されているが、特にS.ペッローネは聖母子像をガウデンツィオ、その他の像をカラヴァッジョ生まれのフェルモ・ステッラの作と特定している⁽⁸⁴⁾。木製の丸テーブルは、既述のG.ロンゲッティが指導していたヴァラッロの彫刻学校で1847年に制作されたものである。

絵画：老いたシメオンと女預言者アンナを描いた壁画も、ガウデンツィオとその工房の手に帰されており、ほぼ同時期の制作と考えられる。

修復：1884年に屋根が改築され、ヴォールトから高く引き上げられた。1969年にはテラコッタ像の修復が行われ、鬘と顎髭がヘアネットに本物の毛髪を植毛して交換された。

第9堂「聖ヨセフの2度目の夢」(天使からエジプトへ逃避するようお告げを受ける聖ヨセフ)

第9堂では、ヘロデ王が指示した嬰兒虐殺を避けるため、天使が夢に現れてエジプトへの逃避をヨセフに告げる場面が展開されている(図31)。

礼拝堂：この礼拝堂は、アレッシの『ミステリーの書』(1565-69)が起草された当時は何もない部屋となっていた。その後、16世紀の60-70年代(1565年以前)に同書に記載されている指示に忠実に従って設営と装飾がなされた。

彫刻：テラコッタの聖母子像は16世紀の10年代から20年代までの間にガウデンツィオが制作した作品で、1572年に旧いロレートの聖家(現第2堂)からこの礼拝堂に移された。聖ヨセフ像と天使像は今なお特定できないロンバルディアの彫刻家が16世紀の70年代に制作した作品と考えられるが、S.ペッローネは作者として既述のフェルモ・ステッラの名を挙げ、しかもそれらを粘土や石灰、大理石等を混合物で制作されたものとしている⁽⁸⁵⁾。

絵画：前室の天井や側壁は、《黄金の子牛の礼拝》や《十戒の記された石板を壊すモーゼ》の場面、アラバスク、花、果物、花綱、天使などの壁画で装飾されている。また、礼拝堂内には、奥壁にスタッコで夜を暗示する人間の顔のようなもの、左壁に《エジプト逃避》の場面や風景、奥壁と右壁にあばら屋のような建物の室内の構造や風景が描かれており、それらは伝統的にジューリオ・チェーザレ・ルイーニの手に帰されてきたが、デ・フィリップスはガウデンツィオ派の系譜に属する16世紀半ばの画家集団の仕事とみなしている⁽⁸⁶⁾。しかし稿者は、壁画が建築に先行して描かれ

ることではないため、16世紀の60年代後半から70年代の制作と考えたい。

修復：1944年の修復によって顎髭と毛髪が取り除かれ、スタッコ製の顎髭と頭髪が付けられた。1976年には壁画と彫刻像が修復され、彫刻については6層の彩色層が取り除かれ、当初の彩色が復元された。また、左壁から聖母子を表現した部分が剥がされ、サクロ・モンテ博物館に移された。2007-08年にも、彫刻、絵画、床、礼拝堂の柵、壁画、前室の板絵、建物のファサードの修復が行われた。

第10堂「エジプトへの逃避」

この礼拝堂には、エジプトへの逃避の場面が表現されている（図32）。

礼拝堂：同堂は1576-80年に『ミステリーの書』の記載に従って、元来は「エジプト逃避」ではなく「嬰兒虐殺」のミステーロ用に建てられたものであった。そして当初の「エジプト逃避」の場面は、同じ頃、現在の第11堂の場所に着工され1583年に完成した礼拝堂に設営され、彫刻も配されていた。しかし後者は1586年に壊され、そこに配されていた塑像群はこの第10堂に移された。

彫刻：ガウデンツィオの彫刻の伝統を受け継ぐスタッコによる彫刻群は1578年にはすでに具現されていたが、作者は不詳である。場面の演出はアレッシの『ミステリーの書』の類似の表現に由来している。

絵画：当初の壁画装飾の作者や制作時期は、古い案内書群によってミラノの画家ジェロラモ・キニョーリによる1640年の作、あるいはフィアミンギーノ（兄）の

1580年頃の作とされてきたが、すでに19世紀には朽ち果てており、彫刻同様、作者は同定されていない。いずれにしても当初の壁画は、1886年に公証人ゾッペッティの出資でフランチェスコ・ブルラツィによって完全に描き直されて現在に至る。また、その機会に、礼拝堂の前室も描き直されている。

修復：1884年に屋根が作り直され、ヴォールトから高く引き上げられた。また、1998年には石製の屋根が修復され、2001年から2008年にかけては窓ガラスが修復されるとともに、防犯用の金網も交換された。

第11堂「嬰兒虐殺」

この礼拝堂では、ヘロデが命じた嬰兒の虐殺場面が表現されている（図33）。

礼拝堂：同堂は、1586年以降、アラニーヤ出身のデンリーコ兄弟（エンリーコ、ジョヴァンニ、ジャコモ）によって建造されたもので、出資者は、1585年に配偶者カテリーナや自身の宮廷を伴って馬でヴァラッロのサクロ・モンテに巡礼したことがあるサヴォイア侯爵カルロ・エマヌエーレ1世であった。この盛大な出来事を祝すため、この礼拝堂の前室には同侯爵の紋章が描かれた。同堂は1587年には完成し、1589年には半地下の空間も具現されていた。

彫刻：90体以上の当初のテラコッタ像の設営は、ヴァルソルダ出身のジャコモ・パラッカ・バルニョラ、通称バルニョラもしくはヴァルソルダ（生没年不詳）⁽⁸⁷⁾とクライーノ出身の当時43歳のミケランジェロ・ロッセッティ（1547-?）⁽⁸⁸⁾が行ったものであることが、玉座の右側の鎧持ちの襟

に記された後者のロッセッティのサインと1590年の年記から分かり、1591年には完成していた。後者は、この礼拝堂の絵画を手掛けていたフィアミンギーニ兄弟の縁者と推測されている⁽⁸⁹⁾。その後1594-95年に、教区の司教カルロ・バスカペの意向で、ミラノ大聖堂建造現場から来た彫刻家ミケーレ・プレスティナーリによってヘロデの玉座と30体の嬰兒像が追加された。また、それらはドメニコ・アルファーニによって同時期に彩色された。

『ミステリーの書』の類似場面から想を得た本場面の彫刻的演出には、塑像を焼成するため、サクロ・モンテの窯が再びさかんに使用された。また、タバケッティや、塑造家としてデビューしたジョヴァンニ・デンリーコも協力したとされる。1617年には、肌の露出を上品とみなした司教タヴェルナの指示で、石膏処理した布で幾体かの像の露出部分が覆われた⁽⁹⁰⁾。

絵画：壁画装飾は、フィアミンギーノ（兄）が1590年に依頼され、弟のジョヴァンニ・マウロ・デッラ・ローヴェレ（c.1575-1640）⁽⁹¹⁾と協力して制作したものである。そして伝統的に、玉座のヘロデ像の左手側（向かって右側）にいる鎧持ちは2人の肖像とされる。さらに2体の像の襟に刻まれた名前から、ヘロデ王に近い方が兄のジョヴァンニ・バッティスタ、他方が弟のジョヴァンニ・マウロの像であることが分かる⁽⁹²⁾。

さらに右壁には、サヴォイア一族へのオマージュとして、カルロ・エマヌエーレ1世の妻カテリーナが16世紀の衣装を着た貴婦人として描かれている。

また、ヴォールトの各セグメントには、「イエスの誕生」や「旅の途上のマギ」、「ヘロデの前のマギ」、「マギの礼拝」、「別の道を通って国に戻るようマギに告げる天使」、「エジプトに逃避するよう夢で聖ヨセフに告げる天使」、「エジプト逃避」、「ヘロデの死」の場面が連続的に描かれている

修復：1848年に屋根が高くされ、壁面の下層部分に漆喰が塗り直された。また、前室の右にあった入口が正面のファサードに移され、正面の窓も拡大された。1945-55年には、このサクロ・モンテの美術監督であったエミリオ・コンティーニが指揮する保存作業の対象となり、フィアミンギーニ制作の壁画の修復が実施された他、ガラス窓の修復や、木製格子から鉄柵への交換、前室の壁面の描き直し、石製の入口への交換なども行われた。

第12堂「キリストの洗礼」

この礼拝堂はキリストの洗礼の場面を受け入れており、洗礼者聖ヨハネはキリストの頭に水を撒き、ヨルダン川の岸辺にいる2人の天使はキリストの服を手を持っている。また、神は高所で、「聞いてほしい、これなるは我が直系の息子なり。」と宣言している（図34）。

礼拝堂：礼拝堂は、アレッシが提示したサクロ・モンテの再編に続く諸作業の一環として、当初は《エジプト逃避》の場面用に建造（1572-76年）され、その後1595年にローマ在住のヴァルセージア出身者の布施で拡張された。それは堂内の記載からも明らかである。当初そこにヨルダン川を真似て水を流すという構想があり、水を流す

ための穴が2つ開けられたが、実現されることはなかった。それらの穴は1628年の修繕時に塞がれたものの、今も床の両側面に認められる。

彫刻：テラコッタの上にスタッコ処理を施したキリストと洗礼者聖ヨハネ、2天使の像は、『ミステリーの書』中に示されていた手本を模してすでに16世紀の70年代に完成されていた。作者はロンバルディア出身の芸術家に帰されるものの、今なお同定はなされていない。ヴォールトに吊るされている父なる神のスタッコ像は、ガブリエーレ・ディ・クリストフォロ・ボッシ（生地・生没年不詳）の作品で、サクロ・モンテの現場監督が1584年8月に絵画装飾、並びに彫刻像の彩色とともに制作を委嘱したもので、同年のうちに完成された。彼はまた、礼拝堂の地面に配されている小さな爬虫類や四足動物のスタッコ像も制作した。1617年に同堂を検閲した司教タヴェルナが、跪くキリスト像を慎みなく哀願的だと見做したため、1628年には彫刻像と礼拝堂の表面に修正が施された。

壁画：絵画装飾は、1584年4月にオラツィオ・ガッリノーネ・ディ・トレヴィリアに依頼されたが、彼の死去によって、その役目は同年8月に上述のガブリエーレ・ディ・クリストフォロ・ボッシに委ねられた。側壁には、「マリアの聖エリサベツ訪問」や「エジプト逃避」の場面が描かれ、ヴォールトには楽奏の天使と礼拝の天使が描かれている。

修復：堂内にある記載から、1715年にピエトロ・ジョヴァンニ・マルティッシ（生没年不詳）が、また1821年にはジョヴァ

ンニ・ボッチョローニ（生没年不詳）とアントニオ・キアラ（生没年不詳）がこの礼拝堂を修復したことが分かる。1784年には、彫刻を付加したことに対してエネア・パヴェーゼ（生没年不詳）に、また、彫刻像の塗り直しを行ったことに対してヴァラッロ生まれの画家アントニオ・オルジャツィ・イル・ヴェッキオ（1725/30–c.1790）⁽⁹³⁾に支払いがなされている。さらに1850年にはカルロ・ジュゼッペ・デルザンノが再び彫刻像を広範囲に亘って描き直した。1944年には、フランコ・バッケッタ（生没年不詳）とカルロ・バッケッタ（生没年不詳）⁽⁹⁴⁾が彫刻を修復し、スタッコ像に施されていた馬のたてがみで作った頭髪や顎髭が取り除かれた。2001–08年には礼拝堂の窓ガラスが修復された。

第13堂「キリストの誘惑」

この礼拝堂は、人間の姿をした悪魔による砂漠でのキリストの誘惑の場面を受け入れている（図35）。

礼拝堂：この礼拝堂は、奥壁の外側の漆喰に記された「1501」という引掻き傷から明らかかなように、最古の建造物のうちのひとつで、16世紀初めには当初の聖域への小さな入口近くにすでに存在していた。そしてアレッシが『ミステリーの書』（1565–69）を起草した頃は、この礼拝堂内では木彫によって十字架を負うキリストの場面が表現されており、しかもこの礼拝堂への出入りは奥壁に設けられていた扉から行われていた。また、壁面のうち2面が暗色であったため、「キエーザ・ネーラ（黒い聖堂）」と呼ばれてもいた。しかし、1570年

にはジャコモ・ダッダの出資で『ミステリーの書』の配列に従ってこの礼拝堂の空間は2分され、「十字架を負うキリスト」の古いミステーロと「キリストの誘惑」のミステーロが含まれることになった。1572年には奥壁の扉が閉じられ、現在の第14堂「サマリアの井戸」側の壁の中央に別の入口が設けられた。さらに70年代には礼拝堂の前方にアーケードも建造され、1576-80年には内部装飾も完成していた。しかし1599年以降、司教バスカペによる配列に従って再設営が行われ、この礼拝堂は「キリストの誘惑」のミステーロだけに献堂されることになり、「サマリアの井戸」の礼拝堂（現第14堂）側の入口も塞がれた。洗練された木製の格子も、おそらくヴァラッロ生まれの木彫刻家、彫物師ガウデンツィオ・ラヴェッリ（1560-1625）が同時期に制作したと考えられている⁽⁹⁵⁾。

彫刻：16世紀初めの制作と推測される当初の「十字架を負うキリスト」のミステーロの古い木彫群は、当時建設中であった「カルヴァリオへの道行き」（現第36堂）の礼拝堂で再利用される予定であったが、タバケッティがそれを拒否したため、処置を保留されたまま最終的に失われるに至った。「キリストの誘惑」の場面のキリストと悪魔の像は、1570年代にスタッコで制作されたものであるが、制作者は同定されていない。1599年にバスカペの指示でミステーロが「キリストの誘惑」のみに限定された際には、テラコッタ製の動物（幾つかは19世紀の付加）が数多く追加されたが、それらはタバケッティとミケーレ・プレスティナーリの作品と推測される。な

お、2体の像の彩色もタバケッティの手になると考えられている⁽⁹⁶⁾。

絵画：左壁には神殿の高みから身を投げるよう唆す悪魔とキリストの姿が描かれ、奥壁には山頂から地上のあらゆる豊かさを示す悪魔とキリストが描かれている。また、右壁には、天使が供する食物を口にするキリストと、炎と渦巻く煙に包まれて崖から転落する悪魔が描かれている。アーケードには、天使像並びに「宗教」と「改悛」の擬人像が単色で描かれ、碑板には、司教バスカペが制定したサクロ・モンテの美術品に損傷を与えた者に対する罰則が記されている。また、アーケードのアーチの弧状の底面は、洗練されたグロテスク模様と単色の大きな装飾メダルによって装飾されているが、それらは16世紀後半（アーケード建造時期を考えれば1570年代以降）の不詳の画家の手になるものである。連続する壁画は、1599年にドメニコ・アルファエニに委嘱されたが、実際に制作したのはメルキオーレ・デンリーコ（1570/75-1641より後）⁽⁹⁷⁾で、17世紀の最初の10年間に制作されたと推測される。

改修・修復：1850年に、カルロ・ジュゼッペ・デルザンノによってほぼすべての彫刻が彩色し直された。1876年にはヴァラッロ生まれのジューリオ・アリエンタ（1826-1900）⁽⁹⁸⁾によってアーケードの壁画が修復され、円柱の基部も交換された。1929年にはアーケードの円柱が作り直され、1946年にはアーケードの側面の扉が塞がれた。2001-08年には礼拝堂の窓ガラスの修復が行われ、2008-09年には湿気を防ぐための周囲の空洞が礼拝堂に装備された。

第14堂「サマリアの井戸」

この礼拝堂も『ミステリーの書』で予定されていたもので、キリストとサマリアの女性との出会いの場面を表現している（図36）。

礼拝堂：この礼拝堂は1572年には既に建設途上にあり、1576年には完成された。そして、玄関上の碑板の銘文が示すように、1595年にはローマ在住のヴァルセーリア出身者の布施によって拡張された。

彫刻：彫刻は石膏である。それらはアレッシの『ミステリーの書』の類似場面の記載に従って、ミラノ文化圏に属する不詳の彫刻家が1580年頃制作したものである。

絵画：壁画も彫刻と同じ頃制作されたもので、地元の画家ジャン・ジャコモ・テスト（c.1550-?）⁽⁹⁹⁾の手に帰されている。

修復：堂内の記載が示す通り、1715年にはP. ジョヴァンニ・マルティッシ（生没年不詳）によって、また1821年にはジョヴァンニ・ボッチョローニ（生没年不詳）とアントニオ・キアラ（生没年不詳）によって礼拝堂の修復が行われた。1831年には、ヴァラッロ生まれの彫刻家ジョヴァンニ・アルベルトーニ（1806-87）⁽¹⁰⁰⁾によって、サマリアの女性像の片足が制作し直された。1979年には屋根が修繕され、上に持ち上げられた。1986-97年の修復により、過去の塗り直しによって部分的に隠されてしまっていた絵画装飾の全体像が明らかにされた。2008-09年には湿気を防ぐための周囲の空洞も礼拝堂に装備された。

第15堂「中風者の治癒」

この礼拝堂は、カペナウムのある人家でイエスが弟子たちに説教する一方、病気がイエスによって癒やされるよう、取り払われた屋根からひとりの中風病みが降ろされる場面が表現されている（図37）。

礼拝堂：この礼拝堂もアレッシの『ミステリーの書』で計画されていたもので、1572年より前にジャコモ・ダッダの費用で着工されたが、完成されたのは1578年であった。しかし彫刻や絵画による堂内の設営が完成するのは、さらに半世紀も後のことであった。1621年には、絵画の仕事を依頼されたロッカピエトラ生まれの地元の画家クリストフォロ・マルティノーリ（オ）、通称ロッカ（c.1599-1644より後）⁽¹⁰¹⁾の兄弟と推測されるジェロニモ・ロッカ（生没年不詳）に鉛を仕込んだガラス戸の製作が委嘱された。洗練された木製格子は、この場面がもつ二重のヴィジョンのために製作されたもので、製作者として既述のガウデンツィオ・ラヴェッリとその息子バルトロメオ・ラヴェッリの名⁽¹⁰²⁾が挙げられているため、1620-21年頃の制作と推測される。

彫刻：16体の見事なテラコッタ像は、ジョヴァンニ・デンリーコが『ミステリーの書』の類似の場面に啓発されて、1620年頃に制作したものである。

絵画：壁面は、上述の通称ロッカによって1621-22年頃に壁画で装飾された。なお、彼への依頼には、条件として、ノヴァーラ司教区庁が定めた史実と方法への準拠が課せられていたという⁽¹⁰³⁾。

修復：1830-31年に、ジョヴァンニ・アル

ベルトーニによって中風病者のマットレスとキリストの衣が修繕され、またヴァラッロ生まれのジャコモ・ボッチョローネ (c.1780-?)⁽¹⁰⁴⁾によって修繕された部分と聖ペテロの衣が塗り直された。また、1850年には、カルロ・ジュゼッペ・デルザンノによって彫刻群が全面的に彩色し直された。1998年には礼拝堂の屋根、2001-08年にはガラス窓が修繕された。

第16堂「ナインの寡婦の息子の蘇生」

この礼拝堂では、ナインに赴いた際に寡婦の一人息子の葬儀に遭遇したキリストが、死んだ少年を蘇生させる場面が表現されている (図38)。

礼拝堂：この礼拝堂もアレッシの『ミステリーの書』で計画されていたもので、1572年より前に着工され、1583年に完成された。この礼拝堂の実現には、ピアネツァ侯爵夫人のマティルデ・デイ・サヴォイアが資金的に貢献している。

彫刻：16体の石膏像は、1587年以降は礼拝堂にあったことが判明している。制作者は、16世紀の最後の20年間にこのサクロ・モンテで活動したカンベルトーニョ出身の彫刻家バルトロメオ・バダレッコ (生没年不詳、16世紀)⁽¹⁰⁵⁾に帰されている。

絵画：壁画は伝統的に地元の画家ジャン・ジャコモ・テストが1583-87年に描いたとされており、描かれた群衆表現にはガウデンツィオ・フェッラーリの様式と図式の伝統が認められる。

修復：1784年に、彫刻像を修繕したことに対してエネア・パヴェーゼに、また、それらを塗り直したことに對してアントニ

オ・オルジャッツィ・イル・ヴェッキオに支払いが行われている。1831年には、彫刻家ジョヴァンニ・アルベルトーニによって新たな作業が実施された。また、1850年にはカルロ・ジュゼッペ・デルザンノが新たに彫刻群の大幅な再彩色を行っている。1969年には、彫刻群の部分的修復 (ナインの寡婦像のみ) と、鬘と顎髭がヘアネット上に植毛した本物の毛髪で作り直されて交換された。1998年には礼拝堂の屋根が修繕され、2001-08年には保護用金属ネットを交換してガラス窓が修繕された。

第17堂「タボル山上でのキリストの変容」

この礼拝堂では、キリストが山上でエリアとモーセと語り合いながら光り輝く姿を3人の使徒に示す場面が表現されている (図39)。

礼拝堂：ここには、最初期には、キリストの昇天の小聖堂が聳えていた。その小聖堂は、1493年には存在していた礼拝堂のひとつであり、それは修道士たちへの土地の寄進記録に挙げられていることから分かる。そして小聖堂内には、現在は大聖堂の右側の説教壇の下に見られる聖なる足跡のレプリカが配されていた。また後に、イエスの木彫像がこの小聖堂から大広場の中央の泉の上に移されたが、それもまた今は同じ大聖堂内の聖ピエトロ・ダルカンタラの祭壇上に置かれている。その後、この山上の景観が変化する中で、同所はタボル山と位置づけられ、再考されるに至った⁽¹⁰⁶⁾。

現在の変容の礼拝堂は、ヴァラッロの現実の山の頂上の岩を壁体の周囲に含んでそ

のタボル山を象徴的に表現しており、総体の中でも最もモニュメンタルな礼拝堂のひとつとなっている。本礼拝堂も『ミステリーの書』で予定されていたもので、山の高所に群像を配する堂内の設営方法も同書から示唆を得ている。基礎部分の建設はジャコモ・ダッダの出資で1572年に開始されたものの、1641年時点でもまだ屋根が載っておらず、1647年にはジョヴァンニ・デンリーコ・イル・ヴェッキオ（?-1586）の第4子ピエトロ・デンリーコの息子であるジョヴァンニ・ジャコモ・デンリーコ⁽¹⁰⁷⁾にその完成が委嘱され、1664年に装飾的なランタンが付加されてようやく完成に至った。なお、その完成はアントニオ・ヴァジーナ・デイ・リメツラからの多額の出資によるものであった。

彫刻：彫刻による主場面は、上方のイエスとエリア、モーセ、ペテロ、ヨハネ、ヤコブからなる変容の場面と、下方で救済を待っているかのように見える傷つき病んだ人々のためにイエスが成し遂げるその他の奇跡の場面とによって構成されている。テラコッタ群の制作者はヴァラッロ出身の彫刻家ピエトロ・フランチェスコ・ペテラ（生没年不詳、17世紀）⁽¹⁰⁸⁾とディオニジ・ブッソラの助手であったカマスコ出身のジョヴァンニ・ソルド（1630-?）⁽¹⁰⁹⁾、制作時期は17世紀の70年代と考えられている。

絵画：壁画は、大聖堂のクーポラの装飾にも携わったトレヴィリオ出身のジョヴァンニ・ステファノ（1608-89）とジュゼッペ（1618-88）のダネーディ兄弟、通称モンタルディもしくはモンタルティによって

1666-75年頃に描かれたものである⁽¹¹⁰⁾。ヴォールトには、父なる神と夥しい数の天使、また、左右の額縁風の四角い枠内に、それぞれシナイ山から律法の板をもって下るモーセ（左）と火の車に乗って天に運ばれるエリア（右）が描かれている。

修復：1812年に小ランタンに漆喰が塗り直された。1884年に屋根が作り直され、ヴォールトによってさらに高くされた。1899年にはジューリオ・アリエンタが彫刻像の再彩色を行った。1929年には、タボル山と法廷の広場の間にあった庭の周囲の壁が移され、彫刻家クレメンテ・バルトリーニが計画したモーセの井戸用の場所がつくられたが、結局資金不足で井戸は実現されなかった。

第18堂「ラザロの蘇生」

この礼拝堂では、イエスによる死んだラザロの蘇生という奇跡の場面が表現されている（図40）。

礼拝堂：この礼拝堂もアレッシの『ミステリーの書』に予定されていたもので、1580年頃建造され、その3年後の1583年には早くも彫刻と壁画で堂内が設営されていた。この建設に資金面で貢献したのはミラノの貴族ポンポニオ・ロッソで、教会財産管理委員は壁画制作者の兄弟であるヴァラッロ出身のロレンツォ・テストが務めていた。1603年には、木製の隔壁を後退させて堂内の空間がより拡張されるとともに、当初から存在していた側面の扉が塞がれた。

彫刻：彫刻群は、上述の通り、1583年までには設置されていたが、その時点での制

作者はカンペルトーニョ出身の彫刻家バルトロメオ・バダレッコと推測され、スタッコで10体制作されていた。その後、場面をより豊かにしようとした司教バスカペの求めで、16世紀の最後の10年間にミラノ大聖堂でも活動していたミケーレ・プレステイナーリの手になる2体のテラコッタ像（左方の格子窓に近い彫刻像と口を開いた男性像）が付加された。1905年には、保存状態の悪さを理由に、当初のキリスト像が、ヴァラッロ生まれの彫刻家カルロ・ヴァネッリ（1814-92）⁽¹¹¹⁾がルイーゼ・ベッリ教授の指揮下で制作した新古典主義風のスタッコによる新しいキリスト像（彩色はチェーザレ・スカッリアによる）と交換された。なお、確認できていないものの、当初のキリスト像は胸像にされ、ヴァラッロ絵画館に収蔵されているという⁽¹¹²⁾。

絵画：この奇跡に居合わせている群衆を描いた壁画は、地元の画家であるジャン・ジャコモ・テストの手に帰され、既述のように1583年までには完成していた。

修復：1784年に、彫刻像の修繕費の支払いがエネア・パヴェーゼに対し、また、彫刻群の再彩色の費用の支払いがアントニオ・オルジャッツィ・イル・ヴェッキオに対してなされている。1884年には屋根が作り直され、高く持ち上げられた。1970年には彫刻群の修復と鬘の交換が行われた。2001-08年にはガラス窓の修復と保護用の金網の交換が行われた。

第19堂「エルサレム入城」

この礼拝堂では、進む道に布を拵げ、オリヴや棕櫚の枝を投げて歓迎する群衆の

中を驢馬の子に乗ってエルサレムに入城するキリストの場面が表現されている（図41）。

礼拝堂：同堂も、アレッシの『ミステリーの書』の中で計画されており、堂内の彫刻群による設営も同書の手本に示唆されて行われた。建設は1578-83年までの間に遡る。

彫刻：最初のスタッコ像も1578-83年に制作されたもので、作者はバルトロメオ・バダレッコとみなされている。その後、司教バスカペの配列に基づいて、ミケーレ・プレステイナーリによるテラコッタ像もおそらく16世紀末に付加された。オリヴの小枝や地面に散らばった枝は、手で切った鉄板でできており、彩色も施されている。その後1721-22年に、ミラノの彫刻家ジュゼッペ・アッリゴーニ（生没年不詳）が前景の2体の像（右の使徒像と左方のユダヤ人像）をテラコッタで作り直し、おそらくボッチョレート出身の画家ピエトロ・ボルセッティ（生没年不詳）⁽¹¹³⁾が1722年にそれらに彩色を施した。

絵画：礼拝堂や彫刻同様1578-83年に描かれた壁画はフィアミンギーノ（兄）に帰される。1722年には、ピエトロ・ボルセッティが右壁の盲扉に2人の使徒像を描いた。1世紀後の1817年には、バルムッチャ生まれの画家ジョヴァンニ・アヴォンド（1763-1829）⁽¹¹⁴⁾が、今度は左の盲扉にその他の人物像を描き加えた。

修復：ファサードの内側の壁に記載されているように、この礼拝堂は1715年にジョヴァンニ・マルティッシによって修復を施された。1884年には屋根が作り直され、

高く持ち上げられた。1929年にはポーチの舗床が剥がされ、大きな石板で覆われた。1970年には、彫刻群の修復と鬘の交換が行われた。2002年には礼拝堂の背後の石壁が修復され、排水装置が装備された。2008年にはガラス窓の保存作業も実施された。

金門

アレッシは山上の広い平地に、城壁で囲まれた都市エルサレムへ通じる「金門」を予定していた。この門は1723年にヴァラッロ生まれの建築家ジョヴァンニ・バッティスタ・モロンディ（1700-70）⁽¹¹⁵⁾によって建造され、同年のうちにピエトロ・ボルセッティによって壁面に旧約聖書の場面が描かれた。しかし、そのオリジナルの壁画は、1890年にフランチェスコ・ブルラツィによって描き直された。

カーザ・パレツラ

この建物は、かつてこのゾーンに配されていた最初期に遡る「ゲツセマニ」や「園での祈り」、「眠る弟子たち」、「キリストの捕縛」の旧礼拝堂群を壊して建てられたもので、2階建てとなっている。建物の名称は、1816年に自身の夏場の滞在場所として上階を建造した女侯爵セヴェリーナ・パレツラの名に因んでいる。1階は、手前がアーケードとなっているが、このアーケードは2階の建設に先行する1776年に建築家エンリーコ・マッソーネ（生没年・生地不詳）の設計で建造されたもので、1863年にはさらに延長されることになる。そしてそのアーケードの奥に、同年の1776年

に建造された第20堂「最後の晩餐」と第21堂「園でのキリストの祈り」、さらにアーケードが延長された1863年に新たに拡張された第22堂「使徒を目覚めさせるキリスト」の3つの礼拝堂が一行に配されている。

第20堂「最後の晩餐」

この礼拝堂では、キリストが受難と死の前夜に、パンとぶどう酒を祝福して12人の弟子に与え、それらを人類の贖罪のために犠牲として十字架につけられる自身の体、流される血であるとした晩餐の場面が表現されている（図42）。

礼拝堂：「最後の晩餐」のミステーロは、時代の移り変わりの中で数度の移設を被った。当初の「最後の晩餐」の旧礼拝堂は、15世紀の最後の10年間にはすでに存在していた。その場所は、今日は「サーラ・カッペツラ」と呼ばれている部屋となっている。その部屋は、18世紀の70年代に建設された霊性修行のための建物で、現在は大聖堂の右側にあつてホテル「カーサ・デル・ペッレグリーノ」となっている建物の裏に隣接している。因みに、そのホテルの場所にはかつて旧大聖堂が聳え、背後にあつた「聖霊降臨」の礼拝堂とともに霊性修行の場となっていた。また、その場所は、配列と聖なる内容の表現の点で、パレスティナのモンテ・シオンのそれらに対応するキリストゆかりの聖蹟を再現していた。

しかし、福音書では最後の晩餐に後続しているキリストのエルサレム入城の場面がヴァラッロでは先行してしまっていたた

め、司教バスカベは最後の晩餐の礼拝堂を物語の流れから逸脱しているとして、「モンテ・シオン」上の当初の部屋から別の礼拝堂に彫刻群を移動させた。

その後、1776年に大聖堂広場の南面に新たにアーケードが造られた際、現在の第20堂が新たな構造で造営されて「最後の晩餐」を受け入れるに至った。

彫刻：16体の彫刻像は、15世紀末に遡るヴァラッロのサクロ・モンテの最古の彫刻群である。それらは見える部分だけを仕上げて彩色した木製のマネキンで、石膏処理した布を塗布し、彩色して完成されている。そして制作者としては、近年、ロンバルディアの木彫家でミラノに工房を構えていたデ・ドナーティ兄弟（ジョヴァンニ・ピエトロ：1470-1529の記録あり、ジョヴァンニ・アンブロジーヨ：1480-1515年の記録あり）が想定されるようになった。置かれたテーブルに添えられた無花果や桃、梨、林檎といったフルーツやチーズの薄切りが載った皿は、バスカベの指示で最後の晩餐のミステーロが当初の場所から別の礼拝堂へ移された時期（1614-15年）に、ジョヴァンニ・デンリーコによって制作されたものである。いずれにしてもテーブルには、15世紀末から19世紀にかけて制作されたテラコッタやテラクルード、木、大理石、吹製法による蠟、カルタ・ペスタ製の多様な断片が並べられている。

絵画：1514年の最古の案内書からは、当初の礼拝堂が絵画によって装飾されていたことが推測されるが⁽¹¹⁶⁾、17世紀の10年代の移設先の礼拝堂に壁画が描かれていたか

は詳らかでない。はっきりしているのは、アントニオ・オルジャッツィ・イル・ヴェッキオが、現在の第20堂に優雅なロココ趣味で壁画（下絵はヴァラッロ絵画館蔵）を描いて完成し、署名と1779年の年記を残したことである。左壁には《弟子の洗足》、奥壁と右壁には料理や葡萄酒もしくは水を運ぶ給仕たちが描かれている。彼はまた、小机や大皿も設計し、彫刻の彩色も行っている。

修復：1972-74年には木製の床が作り直され、木彫像の修復並びに鬘と給仕の衣服の交換が行われた。

第21堂「園でのキリストの祈り」

この礼拝堂では、園で祈るキリストと、キリストに盃を差し出す天使の場面が表現されている（図43）。

礼拝堂：園での祈りに献じられた礼拝堂も1514年の案内書に挙げられているが⁽¹¹⁷⁾、その場所は「ゲツセマニ」のエリアのタボル山の上り勾配辺りにあって、巡礼者は岩を穿った短い階段を使って同堂を訪問していたという⁽¹¹⁸⁾。しかし、17世紀初めに司教バスカベの意向で別の部屋に移された。その後、1776年に大聖堂の南面に新しいアーケードが一直線に建造され、単一のファサードとなった際には、新たな構造で現在の第21堂が設置され、「園でのキリストの祈り」の場面を受け入れた。

彫刻：16世紀初めの礼拝堂にはすでに木彫像が配されていたが、失われてしまい、ジョヴァンニ・デンリーコによるキリストと天使のテラコッタ像が1604年にはすでに設置されていた。これら2体のデンリー

コの彫刻像は、1776年にアーケードが建造され、現在の礼拝堂が完成した際に移されてきたものである。また、1776年にはサヴォイア王家お抱えの彫刻家でカヴァッレルレオーネ出身のジョヴァンニ・バッティスタ・ベルネーロ（1736-96）⁽¹¹⁹⁾が聖カルロ・ボッロメオ像（先行の小礼拝堂ではカルロ像は壁に描かれていた）をテラコッタで制作してサクロ・モンテに寄進している。それは、ヴァラッロ訪問時に同ミステーロの前で祈りと黙想を行っていた聖カルロを記念して、この礼拝堂に彼の像が配されていることを1604年時点で望んでいた司教バスカペの意向を再開するものであったと言える。

絵画：当初の小礼拝堂と17世紀初めの移転後の礼拝堂の壁画については不詳である。現在の壁画は、1778年に、アントニオ・オルジャッジ・イル・ヴェッキオが監修したものである。

修復：1778年にアントニオ・オルジャッジ・イル・ヴェッキオは彫刻像の再彩色も実施した。また、1820年には、画家で鍍金家でもあるマウリツィオ・アントニーニ（生没年不詳）⁽¹²⁰⁾が彫刻像の再鍍金を行った。1850年にも、画家カルロ・ジュゼッペ・デルザンノによって再びそれらの描き直しが実施された。1974年には彫刻像の部分的修復が実行され、鬘と顎髭もヘアネットに本物の毛髪を植毛して作り直された。

第22堂「使徒を目覚めさせるキリスト」

この礼拝堂では、オリーヴ園での祈りの後、眠り込む3人の弟子たちを見て、キリ

ストが驚く場面が示されている（図44）。

礼拝堂：当初の「使徒を目覚めさせるキリスト」の礼拝堂は、司教バスカペの意向で、現在第17堂が建っているタボル山の傾斜地に17世紀初めに建造されたものであった。その後、1863年にカーザ・パレッラのアーケードが延長された際、この礼拝堂は拡張され新たな礼拝堂となった。

彫刻：当初は木彫像が配されていたが⁽¹²¹⁾、現在の3体の弟子⁽¹²²⁾とキリストのテラコッタ像はジョヴァンニ・デンリーコによって1605-06年に制作され、弟のメルキオーレ・デンリーコによって彩色されたものである。因みにメルキオーレの採用については、1602年に画家モラッツォーネにその判断が求められていた⁽¹²³⁾。17世紀初頭に制作されたそれらの彫刻群は、1863年の拡張工事の後、パラヴィア・ヴィリアーリ家の費用で完成した新しい空間に再設置された。

絵画：当初の壁面はメルキオーレ・デンリーコが1612年に描いたものであったが、1863年の拡張工事後の現在の壁画は、トリノ生まれの画家パオロ・エミリオ・モルガーリ（1815-82）⁽¹²⁴⁾が1865年に描いたものである。

次号（第18号）へ続く

【註】（前号（第16号）からの通し番号）

(43) Ente di Gestione dei Sacri Monti の 公 式
ホームページ、

<https://sacrimonti.org/en/sacro-monte-divarallo>
(2023年11月12~20日閲覧)

(44) 原文は以下の通り。“Questa Nuova

- Gerusalemme rappresenta la vita, la passione e tutte le gesta del Redentore”
- (45) E. De Filippis, “Il restauro delle colossali statue in rame di Bernardino Caimi e di Gaudenzio Ferrari al Sacro Monte di Varallo”, in *Sacri Monti. Rivista di arte, conservazione, paesaggio e spiritualità dei Sacri Monti piemontesi e Lombardi*, n.2/2010, a cura di E. De Filippis, Varallo, 2010, p. 447
- (46) 1833年に同名の画家の息子としてリーマ・サン・ジュゼッペに生まれ、1889年にヴァラッコで没した彫刻家。1852年にヴァラッコの美術学校での初等教育を終えた後、ミラノのアッカデミーア・デイ・ブレラで学んだ。ミラノでの活動後、1871年にヴァラッコのバローロ彫刻学校（Laboratorio Barolo）に移り、没するまで同校を運営。“Antonini Giuseppe iunior”, in C. Debiaggi, *Dizionario degli artisti valesiani dal secolo XIV al XX*, Varallo 1968, pp. 4-5
- (47) Filippis, “Il restauro delle colossali statue ...”, *op. cit.*, p. 448. 19世紀のミラノの彫刻家で、ヴァラッコの他、ノヴァーラやブレシャなどに19世紀の第4四半期に制作した作品が残る。“La Porta”, <https://www.sacromontedivarallo.org/wp/course/la-porta> (©2016-2023 sito ufficiale della Basilica di S. Maria Assunta del Sacro Monte di Varallo); *Il Sacro Monte di Varallo. Il Vangelo in immagini*, a cura di Amministrazione di Vescovile di Sacro Monte di Varallo, Milano, s. d., p. 11
- (48) Filippis, “Il restauro delle colossali statue ...”, *op. cit.*, pp. 448-449; S. Stefani Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, Aa. Vv., *Sacri Monti in Piemonte. Itinerari nelle aree protette di Belmonte, Crea, Domodossola, Ghiffa, Orta, Varallo*, Torino, 1994, p. 144
- (49) E. De Filippis, *Guida del Sacro Monte di Varallo*, Borgosesia, 2009, p. 37
- (50) ジョヴァンニ・タバケッティ（ジャン・ドウ・ヴェスパン）はブラバント公国デナン出身のフランドル派の彫刻家で、1587年の来伊以降は、1588年に短期間故国に戻った以外、ヴァラッコで没するまでイタリアで活動し、クレアやヴァラッコのサクロ・モンテに数多くの作品を残した。“Wespin, Jean”, in *Benezit Dictionary of artists*, Vol. 14, Paris, 2006, pp. 813-814; G. Riviera, *La strada del Fiammingo, Dal Brabante al Monferrato: I Tabachetti di Fiandra*, Torino 2017, p. 334 e p. 338 所載の“Tavole geneologiche”と“Cronologia”参照
- (51) M. プレスティナーリはレオーネ・レオーニとボンペオ・レオーニの工房で活動。息子のクリストフォロ・ジョヴァンニとマルク・アントニオも彫刻家。“Prestinari, Cistoforo Giovanni e Marco Antonio”, in *Dizionario Biografico ... op. cit.*, Vol. 85, 2016; S. Gatti, “Un amico del Bambaia: Monsignor Traiano da San Celso”, a cura di M. L. Gatti Perer e A. Rovelta, *Cesare Cesariano e il classicismo di primo Cinquecento*, Milano 1996, p. 150
- (52) リアーレ・ダラーニャに1559年頃生まれ、ボルゴセージアで1644年に没。芸術家一家に生まれ、1586年以降ヴァラッコのサクロ・モンテにおいて彫刻家、建築家としての活動。“Giovanni D’Enrico”, in Filippis, *Guida ... op. cit.*, pp. 144-147

- (53) Domenico Alfani: ペルージャ出身の画家・建築家で、カルロ・ヴァスカベが1593年にノヴァーラ司教となって以降、1603年頃まで礼拝堂装飾や造営に関与。同じペルージャ出身の同名の画家 Domenico Alfani (o Domenico di Paris Alfani) (c. 1480–c.1553) とは別人。P. Galloni, *Sacro Monte di Varallo. Origine e svolgimento delle opera d'Arte*, Varallo, 1914, pp. 266-267
- (54) Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, pp. 144-145
- (55) Filippis, *Guida ... op. cit.*, p. 37
- (56) Filippis, *Guida ... op. cit.*, p. 37
- (57) ミラノで生まれた画家、フレスコ画家、素描家。弟のジョヴァンニ・マウロも画家で、両者の作品を識別することはしばしば困難。父親がアントウェルペン生まれのため、「フィアミンギーノ」とも呼ばれる。“Rovere, Giovanni Battista della, the Elder”, *Benezit Dictionary ... op. cit.*, Vol. 12, p. 49; *Il gran teatro barocco. I Fiamminghini e i Trionfi dei santi Faustino e Giovita*, a cura di G. Fusari, Roccafranca, 2010 参照
- (58) Filippis, *Guida ... op. cit.*, p. 37 は制作年を言及していないが、Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 144 は1594年としている。
- (59) パルマ生まれで、パルマとナポリのアカデミーアで学んだ後、若くしてヴァラッロに移り、亡くなるまで同地の美術学校の教官、校長を務めた画家。“Burlazzi Francesco”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, p. 26
- (60) “Moietta, Nicola, in *Dizionario Biografico degli Italiani*, Vol. 75, 2011 によれば、ヴィンチェンツォとジェローラモは、カラヴァッジョ生まれの画家ニコラ・モイエッタあるいはニコラ・マンゴーネ (1480/1486–1546) の息子で、1546年にニコラが没した時には2人は未成年であった。2人は父と同様画家になったが、ジェローラモが無名の職人に留まったのに対し、ヴィンチェンツォは装飾家として地元である程度有名であったとされる。
- (61) Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 147 は、先行のマリア像とエリサベツ像をそのように推測。
- (62) *Ibid.*, p. 147 は、「伝承によれば、タバケッティが着手したものの、気がふれて仕事を中断し、バルトロメオ・ラヴェッリが制作 (1608~1612)」したと言及。また、例えば G. Bordiga, *Storia e Guida del Sacro Monte di Varallo*, Varallo, 1857, p. 40 など、同書に先行する文献もラヴェッリの名前に言及。しかし、Filippis, *Guida ... op. cit.*, p. 42 や世界遺産のサクロ・モンテ群を総括するヴァラッロの管理財団の最新の公式サイト (<https://www.sacrimonti.org/en/sacro-monte-varallo/punto-di-interesse/-/d/cappella-3-la-visitazione>) は「不詳の作者」としており、ここでは後者に従った。
- (63) 伝統的にジューリオ・チャーザレ・ルイーニの手に帰されてきたが、ヴァラッロの管理財団の公式サイトは作者を Filippo Cavallazzi とし、Filippis, *Guida ... op. cit.*, p. 42 は不詳とする。
- (64) 1835年にヴァラッロで生まれ、1924年にビエッラで没した画家・装飾家。ミラノで装飾絵画を学び、キアロスクーロの専門家となり、ノヴァーラやヴェルチェッリの

- 数多くの教会堂を装飾した。“Bonini Andrea”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, p. 21
- (65) Filippis, *Guida ... op. cit.*, p. 45
- (66) M. Cusa, *Il Sacro Monte di Varallo*, 1^a ristampa (1^a stampa, Varallo, 1857), Borgosesia, 1984, pp. 23-24
- (67) S. Batler, *Ex voto. Studio artistico sulle opera d'arte del S. Monte di Varallo*, 1^a ristampa, Borgosesia, 1985, (1^a edizione, Novara, 1894), p. 179
- (68) Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 148
- (69) Filippis, *Guida ... op. cit.*, p. 45
- (70) Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 148
- (71) *Ibid.*, p. 148. ジュゼッペ・ブラツィアーノはバスティア・デイ・ボルゴセージアで生まれ、ヴァラッロでの修学後、おそらくトリノで絵画制作の専門家となり、19世紀末から20世紀初めの数十年間にもっぱら地元で宗教画を制作。“Braziano Giuseppe”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, p. 25. また、ヴァラッロ生まれのティート・ルクレツィア・レガルディは本質的に風景画家で、トリノに住みながら故郷の芸術や芸術家組織の活動に参加。“Regaldi Tito Lucrezia”, in *ibid.*, pp. 149-150
- (72) 以上、Filippis, *Guida ... op. cit.*, p. 46
- (73) バルトロメオ・ラヴェッリは、木彫家で彫物師のガウデンツィオ・ラヴェッリの息子として1589年にヴァラッロに生まれた彫刻家、建築家。彫刻家としてはジョヴァンニ・デンリーコの弟子、助手として、また、建築家としてはデンリーコとともにサクロ・モンテ全体に関係する新プロジェクトに従事。父親の彫物師、木彫家としての仕事にも従事。“Ravelli Bartolomeo”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, pp. 146-147
- (74) ジャコモはボルディガ、次いでミラノではアンデルローニ、ロンギの弟子であった版画家で、ラファエロ、ガウデンツィオなどの数多くの名画の版画による複製を制作。1830年から没するまで、自身も学んだヴァラッロの美術学校で教鞭をとった。“Geniani Giacomo”, in *ibid.*, pp. 73-74
- (75) “Capitulo III”, in *Questi sono li Misteri che sono sopra el Monte de Varalle (in una “Guida” poetica del 1514)*, a cura di S. Stefani Perrone, Introduzione di G. Testori, Borgosesia, 1987, p. 25
- (76) Filippis, *Guida ... op. cit.*, p. 50
- (77) E. De Filippis, “27. Gaudenzio Ferrari, Natività”, in *Il Rinascimento di Gaudenzio Ferrari*, a cura di G. Agostini e J. Stoppa, Milano, 2008, p. 216; なお、E. De Filippis, M. Caldera, A. Castellano, M. Santella, “Il restauro delle statue della cappella della Natività di Gaudenzio Ferrari al Sacro Monte di Varallo”, in *Sacri Monti. Rivista di arte, ... op. cit.*, n.2/2010, p. 477によれば、色合いは、油性もしくはタンパク質性媒材の均質な色の下地をテラコッタの見える部分にのみ直に施して実現している。
- (78) ヴァラッロのモロンド生まれの19世紀の彫刻家。1851年にフェッリアーリの後任としてバローロ彫刻学校の校長となり、同郷の数多くの青年に彫物や彫刻の基礎を教えた。“Longhetti Giovanni”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, pp. 102-103.

- (79) Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 149
- (80) “Capitolo III”, in *Questi sono ...*, *op. cit.*, p. 25
- (81) Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 150は、当初は木彫像だったとする。
- (82) 現在は2頭の動物だけが残る。但し、牛は木彫であるものの驢馬はテラコッタである。*Questi sono ... op. cit.*, p. 25
- (83) Filippis, “28. Gaudenzio Ferrari, Madonna, San Giuseppe, Asino”, in *Il Rinascimento ... op. cit.*, p. 222
- (84) Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 150
- (85) *Ibid.*, p. 151
- (86) Filippis, *Guida ... op. cit.*, p. 57
- (87) ジャコモ・パラッカは1570–90年頃、ルガーノ近くのヴァルソルダで活動した16世紀のイタリアの彫刻家。“Paracca Giacomo”, in *Benezit Dictionary ...*, *op. cit.*, Vol. 10, p. 886
- (88) ミケランジェロ・ロッセッティは1547年にクライーノに生まれた彫刻家。没年不詳。“Rosesetti, Michelangelo”, in *Benezit Dictionary ...*, *op. cit.*, Vol. 11, p. 1406; 同堂の鎧持ちの像に施された諸々のサインについては、Galloni, *Sacro Monte di Varallo. Origini ... op. cit.*, pp. 244-246を参照
- (89) Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 152
- (90) *Ibid.*, p. 153
- (91) ジョヴァンニ・マウロはジョヴァンニ・バッティスタの弟で、1575年頃ミラノに生まれ、1640年にミラノで没した画家、フレスコ画家、版画家。ミラノやコモ、ブレーシャ、ノヴァーラ、パドヴァなどで制作。“Rovere, Giovanni Mauro della”, in *Benezit Dictionary ...*, *op. cit.*, Vol. 12, p. 49
- (92) Galloni, *Sacro Monte di Varallo. Origine ... op. cit.*, pp. 245-246
- (93) ヴァラッロ生まれのクアドウラトゥーラの画家で、同名の息子も画家。“Orgiazzi Antonio, o Giovanni Antonio il Vecchio”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, pp. 127-128
- (94) フランコとカルロのバケッタ兄弟はトリノの画家、彫刻家でひとは医者でもあった。第2次世界大戦中、トリノへの最初の爆弾投下の後ヴァラッロのサクロ・モンテに避難して1948年まで滞在したが、その間サクロ・モンテ関連の絵画や版画を制作したり彫刻の修復に協力したりした。“Disegni di Franco Bacchetta sulle opera di Gaudenzio Ferrari”, <https://www.sacromontedivarallo.org/wp/2018/04/30/disegni-di-franco-bacchetta-sulle-opere-di-gaudenzio-ferrari/> (30 Aprile 2018 参照)
- (95) Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 154; “Ravelli Gaudenzio”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, p. 147
- (96) *ibid.*, p. 155
- (97) メルキオーレはデンリーコ家の7人兄弟の6番目として生まれた画家で、地元のマニエリスム末期の環境の中で成長し、1600年後半に初めて兄のタンツィオとともにセージア谷を離れ、ロンバルディアの環境に身を置いた。“D’Enrico Melchiorre il vecchio”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, pp. 50-51. 壁画の描写については、

- M. Cusa, *Il Sacro Monte di Varallo*, varallo, 1857, pp. 43-44 の Cappella XIII の解説が詳しい。
- (98) アリエンタは大胆で進取の気風に富んだ画家で、ヴァラッコではジェニアーニ、トリノではアリエンタに学び、フィレンツェやローマでも学んだ。セージア谷の文化財の保護組織や修復にも尽力。“Arienta Giulio”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, p. 7
- (99) “Testa Gian Giacomo”, in *ibid.*, pp. 166-167. テスタはヴァラッコで生まれた16世紀の画家で、16世紀第4四半期にサクロ・モンテの複数の礼拝堂の壁画を手掛けた。
- (100) アルベルトーニはヴァラッコに生まれ、ヴァラッコ、ミラノ、トリノで学び、1850-80年のトリノ地域の芸術界を代表する人物のひとりとなった彫刻家。
- (101) “Martinolio Cristoforo detto il Rocca”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, pp. 111-112
- (102) Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 156
- (103) *Ibid.*, p. 156
- (104) “Boccioloni Giacomo”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, pp. 16-17では「ボッチョローニ」とされている。ヴァラッコ出身の画家で、マツォーラの弟子。
- (105) “Badarello Bartolomeo”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, pp. 12-13によれば、案内書群においてしばしば“Bartolomeo Ravello”と記されてきたため、ヴァラッコ生まれの“Bartolomeo Ravelli”と混同されてきたという。16世紀の最後の20年間にサクロ・モンテで制作に従事。
- (106) *Il Sacro Monte di Varallo. Il Vangelo in immagini ... op. cit.*, p. 70 参照。但し1403と誤記している。1493年の土地や礼拝堂の寄進については、P. Galloni, *Sacro Monte di Varallo*, Varallo, 1909, pp. 3-25の“Capitolo I Atti di Fondazione”参照
- (107) 1647年2月12日にのみ記録される。“D’Enrico”, in *Dizionario Biografico degli Italiani*, Vol. 38, 1990
- (108) “Petera Pier Francesco”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, p. 135では「ピエル」と表記し、ヴァラッコ生まれの17世紀の彫塑家で、G. デンリーコの工房で修業したとする。
- (109) かつての研究書や Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 157; “Soldo Gaudenzio”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, p. 163では名前が「ガウデンツィオ」とされ、Filippis, *Guida ... op. cit.*, p. 74や最新の管理財団HP等では「ジョヴァンニ」と改められているが、同一人を指していると考えられ、1630年にヴァラッコに属するカマスコ村に生まれた彫刻家で、ディオニジ・ブッソラの弟子とされる。
- (110) Filippis, *Guida ... op. cit.*, p. 74は姓を「モンタルド」、通称を「イ・ダネーディ」としている他、文献や辞典によって「Montaldo」、「Montalto」、「Doneda」、「Danedi」など表記が異なっている。“Danedi, Giuseppe”, “Danedi, Stefano”, in *Benezit Dictionary ... op. cit.*, Vol.4, pp. 388-389によれば、トレヴィリオ生まれで兄ジュゼッペも弟のステファノもモラッ

- ツォーネの下で修業した17世紀の画家とされる。
- (111) “Vanelli Carlo”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, p. 173 参照。バローロ彫刻学校で学び、次いでスイスで手工芸家となった後、再びラヴェンナとミラノのアッカデミーアで学び、フランスでは装飾家、ヴァラッロでは彫刻家として活動。
- (112) Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 158
- (113) “Borsetti Pietro”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, p. 24 参照
- (114) “Avondo Giovanni”, in *Ibid.*, pp. 7-8 参照。最初はヴァラッロのロッコ・オルジャッツィ、次いでトリノのアッカデミーアのロレンツォ・ペシューの弟子として絵画を学んだ。13年間アルバで働いた後、セージア渓谷に戻り、オルジャッツィの後任としてヴァラッロの絵画学校で絵を教えた。非常に活動的で筆も早く、地元を中心に数多くの作品を制作。
- (115) “Morondi Giovanni Battista”, in *Ibid.*, pp. 119-120 参照。モロンディは、18世紀のピエモンテの3人の偉大な建築家、F. ユヴァラ、B. A. ヴィットーネ、ベネデット・アルフィエーリの建築作品に直接触れて学びながら建築家として成長。
- (116) “Capitolo VII”, *Questi sono li Misteri ... op. cit.*, p. 25; 大野陽子「付録 1514」年の案内書「これなるはヴァラッレの山の上なる信仰の神秘である」の第7章、『ヴァラッロのサクロ・モンテ』三元社 2008年 逆ノンブル p. 2
- (117) “Capitolo VIII”, in *Questi sono li Misteri ... op. cit.*, p. 27
- (118) Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 161
- (119) 画家クラウディオ・フランチェスコ・ボモンの学校を経てローマで石彫を学び、イグナツィオ・コッリーノの弟子となる。1774年サルデーニャ王ヴィットーリオ・アメデオ3世より王室付彫刻家に任命され、1778年にはトリノのアッカデミーアの教授にも指名された。とりわけピエモンテに傑出した作品を残した。“Bernero, Giovanni Battisti”, in *Benezit Dictionary ... op. cit.*, Vol. 2, p. 286; “Bernero, Giovanni Battisti”, in *Dizionario Biografico ... op. cit.*, Vol. 9, 1967
- (120) “Antonini Maurizio”, in Debiaggi, *Dizionario degli artisti ... op. cit.*, p. 6 参照。19世紀前半に活動したヴォッカ出身の画家。リーマ・サン・ジュゼッペ教会の絵画制作ではジョヴァンニ・アヴォンドと共作。
- (121) Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 161
- (122) これまで弟子像は3体ともデンリーコの作とされてきたが、Filippis, *Guida ... op. cit.*, p. 86 や、最新のサクロ・モンテ管理財団のHP (<https://www.sacrimonti.org/en>) では、3体のうち2体のみデンリーコ作としている。しかし、それらの同質性から稿者は3体ともデンリーコの作と考える。
- (123) Perrone, “Sacro Monte di Varallo”, in *op. cit.*, p. 161
- (124) サヴォイア家の宮廷画家であった父ジュゼッペの子としてトリノに生まれ、絵の最初の手ほどきも父から受けた。1830年以降トリノのアッカデミーア・アルベルティーナで学んだ後、国内の主要な絵画館

を巡って修業を積んだ後、トリノに戻り、主に同地の教会やサヴォイア家のために絵画制作を行い、トリノで1882年に没。弟のロドルフォも画家。“Morgari, Paolo Emilio”, in *Dizionario Biografico degli Italiani*, Vol. 76, 2012 参照

【図版出典】

図23-32、34-44：稿者撮影

図33：サクリ・モンティ管理運営財団 (Ente di Gestione dei Sacri Monti) 本部のサクロ・モンテ・デイ・ヴァラッロ特別保護区 (Riserva speciale del Sacro Monte di Varallo) 提供

【謝辞】

本稿はJSPS 科研費18K00177 (研究代表) の助成を受けて行った研究成果の一部である。掲載写真はサクリ・モンティ管理運営財団の許可を得て撮影させて頂いたものである。特に当時の管理運営財団長、現ピエモンテ地方博物館総局長のエレナ・デイ・フィリッピス (Dott.ssa Elena De Filippis) 氏とサクロ・モンテ・デイ・ヴァラッロ特別保護区の職員の皆様にこの場を借りてお礼申し上げる次第である。また、素材や制作者、制作年代が不明、あるいはそれらについての研究者の見解が異なる幾つかの礼拝堂については、特に同保護区のステファノ・アイエッティ (Dottor Stefano Aietti) 氏に御教示頂いた。重ねて御礼申し上げたい。



図23 第1堂「アダムとエヴァ」
礼拝堂：G.アレッシ設計（1565?–66年）／彫刻：G.タバケッティ（1595–99年）、G.デンリーコ（1594年）、G.アントニーニ（1884年）、不詳の彫刻家など／絵画：F.ブルラッツィ（1884年）



図25 第3堂「マリアのエリサベツ訪問」
礼拝堂：不詳（1544年より少し前）／彫刻：不詳の彫刻家（1611–13年）／絵画：A.ボニーニの描き直し（19世紀末）



図27 第5堂「マギの到着」
礼拝堂：G.フェッラーリ（1516–1519/20年）／彫刻：G.フェッラーリと助手（16世紀20年代）／絵画：G.フェッラーリと助手（16世紀20年代）



図24 第2堂「受胎告知」
礼拝堂：G.フェッラーリ（1514年より少し後）／彫刻：G.フェッラーリ（1510年頃）／絵画：不詳（ガウデンツィオ派）（16世紀前半）



図26 第4堂「聖ヨセフの最初の夢」
礼拝堂：不詳の建築家（17世紀10–20年代）／彫刻：G.デンリーコ（17世紀初め）／絵画：不詳の画家（17世紀10–20年代?、20世紀20年代）



図28 第6堂「キリストの降誕」
礼拝堂：不詳（1514年以前）／彫刻：G.フェッラーリ（1515年頃）、G.ロンゲッティ（1852年より後）／絵画：ガウデンツィオ派（16世紀）



図29 第7堂「羊飼いの礼拝」
 礼拝堂：不詳の建築家（1514年以前）／彫刻：不詳の木彫家（1514年以前）、G.フェッラーリと助手（1515-17年）、G.デンリーコ（1627-28年）／絵画：不詳の画家（19世紀末）



図30 第8堂「神殿への奉獻」
 礼拝堂：不詳の建築家（1514年以前）／彫刻：G.フェッラーリと助手（1510年代）／絵画：G.フェッラーリと助手（1510年代）



図31 第9堂「聖ヨセフの2度目の夢」
 礼拝堂：不詳の建築家（1565年以前）／彫刻：G.フェッラーリ（16世紀10-20年代）、不詳の彫刻家（16世紀70年代）／絵画：ガウデンツィオ派（16世紀60-70年代?）



図32 第10堂「エジプトへの逃避」
 礼拝堂：不詳の建築家（1576-80年）／彫刻：不詳の彫刻家（1578年以前）／絵画：F.ブルラツィ（1886年）



図33 第11堂「嬰兒虐殺」
 礼拝堂：デンリーコ兄弟（1586-89年）／彫刻：G.P.パルニョラ、M.ロッセッティ（1590-91年）、M.プレスティナーリ（1594-95年）／絵画：フィアミンギーノ兄弟（1590年）



図34 第12堂「キリストの洗礼」
 礼拝堂：不詳の建築家（1572-76年、1595年拡張）／彫刻：不詳の彫刻家（16世紀70年代）、G.C.ボッシ（1584年）、E.パヴェーゼ（1784年）／絵画：G.C.ボッシ（1584年）



図35 第13堂「キリストの誘惑」
礼拝堂：不詳の建築家（1501-99年）／彫刻：不詳の彫刻家（16世紀初め？、1570年代）、タバケッティとM.プレスティナーリ（1599年以降）／絵画：不詳の画家（1570年代以降？）、M.デンリーコ（17世紀最初の10年間）



図36 第14堂「サマリアの井戸」
礼拝堂：不詳の建築家（1576年完成、1595年拡張）／彫刻：不詳の彫刻家（1580年頃）／絵画：G.G.テスタ（1580年頃）

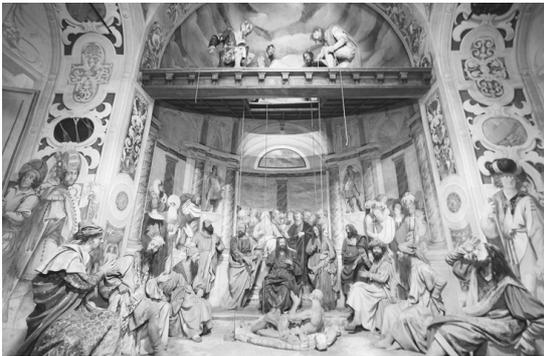


図37 第15堂「中風者の治癒」
礼拝堂：不詳の建築家（1572年より前-78年）／彫刻：G.デンリーコ（1620年頃）／絵画：ロッカ（C.マルティノーリオ）（1621-22年）



図38 第16堂「ナインの寡婦の息子の蘇生」
礼拝堂：不詳の建築家（1572年より前-83年）／彫刻：B.バダレッコ（16世紀80年代）／絵画：G.G.テスタ（1583-87年）



図39 第17堂「タボル山上でのキリストの変容」
礼拝堂：不詳の建築家、G.G.デンリーコ（1572-1664年）／彫刻：P.F.ペテラ、G.ソルド（17世紀70年代）／絵画：ダネーディ（モンタルディ）兄弟（1666-75年）



図40 第18堂「ラザロの蘇生」
礼拝堂：不詳の建築家（1580年頃完成、1603年拡張）／彫刻：B.バダレッコ（1578-83年）、M.プレスティナーリ（16世紀末）、カルロ・ヴァネッリ（1905年）／絵画：G.G.テスタ（1583年）



図41 第19堂「エルサレム入城」
 礼拝堂：不詳の建築家（1578-83年）／彫刻：B.バダレッコ（1578-83年）、M.プレスティナーリ（16世紀末）、G.アッリゴーニ（1721-22年）／絵画：フィアミンギーノ（兄）（1578-83年）、P.ボルセッティ（1722年）、G.アヴォンド（1817年）



図42 第20堂「最後の晩餐」
 礼拝堂：E.マッソーネ（1776年）／彫刻：デ・ドナーティ兄弟の工房（15世紀末）、G.デンリーコ（1614-15年）／絵画：A.オルジャッツィ（1779年）



図43 第21堂「園でのキリストの祈り」
 礼拝堂：E.マッソーネ（1776年）／彫刻：G.デンリーコ（1604年より前）、G.B.ベルネーロ（1776年）／絵画：A.オルジャッツィ（1778年）



図44 第22堂「使徒を目覚めさせるキリスト」
 礼拝堂：不詳の建築家（17世紀初頭、1863年拡張）／彫刻：G.デンリーコ（1605-06年）／絵画：M.デンリーコ（1612年）、P.E.モルガーリ（1865年）

関根 浩子：ヴァラッロのサクロ・モンテとその礼拝堂装飾（2）

礼拝堂・他	主題	場所	分野	主題・モチーフ	技法・素材	芸術家名 (設計・施工者)	建造・制作時期	制作に從事した時期													
								1451～1500年	1501～1550年	1551～1600年	1601～1650年	1651～1700年	1701～1750年	1751～1800年	1801～1850年	1851～1900年	1901～1950年	1951～2000年			
9	聖ヨセフの2度目の夢	堂内	彫刻	聖母子(旧ロレート) の聖家の像)	テラコッタ	G. フェッラーリ	1510-20年代														
				ヨセフ、天使	粘土、石灰、大理石等の混合剤	ロンバルディアの不詳の彫刻家	1570年代														
10	エジプトへの逃避	堂内	建築	不詳	Fresco	不詳, G. アレッシの書に依拠	1576-80年														
				風景	Fresco	F. プララツィ	1580年頃?														
11	聖母産後	堂内	彫刻	『ミステーリの書』由来	スタッコ	不詳	1578年以前														
				聖母産後、キリスト伝など	Fresco	デンリーコ兄弟	1586-89年														
				当初の設置、90体以上	テラコッタ	G. P. パルニョラ、M. ロッセツァイ	1590-91年														
				ヘロデの玉座、30体の聖児	テラコッタ	M. プレストイナリー	1594-95年														
12	キリストの洗礼	堂内	建築	御訪問、エジプト逃避、天使	Fresco	不詳, G. アレッシの書に依拠、拡張はD. アルファニー?	1572-76年、1595年拡張														
				キリスト、ヨハネ、天使	テラコッタ、スタッコ	ロンバルディア出身の不詳の彫刻家	16世紀70年代														
				父なる神、爬虫類、四足動物	スタッコ	G. デイ・クリストフォロ・ボッシ	1584年														
				彩色	油性か蛋白質性の溶剤による絵具?	G. デイ・クリストフォロ・ボッシ	1584年														
13	キリストの誘惑	堂内	彫刻	不明(追加)	スタッコ?	E. バヴェーゼ	1784年														
				像の増彩色	油性か蛋白質性の溶剤による絵具?	A. オルジャツィ	1784年														
				アーケード	木製	不詳	1501-99年														
				格子	G. ラヴェッリ	1570年代															
13	キリストの誘惑	堂内	彫刻	天使、擬人像、罰則、装飾様式	Fresco	不詳	16世紀後半(1570年代以降?)														
				修復	不詳	G. アリエンタ	1876年														
				キリストの誘惑の連続画	Fresco	M. テンリーコ	17世紀最初の10年間														
				十字架を扱うキリスト、悪魔	木彫	不詳	16世紀初め?														
13	キリストの誘惑	堂内	彫刻	動物	スタッコ	不詳	1570年代														
				動物	テラコッタ	タバウツァイ、M. プレストイナリー	1599年以降														

